



町民文芸

只見短歌会

二月詠草

大塚栄一

指導

友葬り待つ人もなき家に入れば朝餉の白ひかすかに残る

馬場 八智

小倉キミ子

北西の風の運べる雪の嵩隣家も見えぬ高さとなりぬ

古川 英子

合格を知らせに孫が来るといふに三月初めの吹雪が続く

新国由紀子

色紙書く母の齢の高ければ仕事終へし夜遅く見習ふ

関谷登美子

雪まつり復興願ふ只見線東京駅の雪像に観る

渡部ゆき子

雪国の定めか今年も落雪の犠牲者二人絶ゆる事なし

五十嵐夏美

級友ら逝きし娘に雪まつりの尺玉花火を二個揚げくれぬ

目黒 富子

予想つかぬ積雪早く日常の乱れに人等の絆深まる

渡部ヨリ子

亡き母の命日近づき大吹雪の葬儀の様が脳裏離れず

新国 洋子

杖なくば歩けぬわれの入浴に店員ら時折り声かけくるる

(出詠順)

只見俳句会

三月例会

目黒十一

指導

ぐだぐだとすることもなく風邪つびき

信

節分や子らの声なし鬼もなし

節分や子らの声なし鬼もなし

触るるたび笑ひを含むつるし雛
紅梅や十間蔵の^{じっけんくら}大身槍^{おおもみやり}

順子

千年の松が枝に降る雪無限

リウコ

隅ずみに節分の豆転がりて

隅ずみに節分の豆転がりて

立春や風呂に入りて一呼吸
樹氷林朝日に向かい凜と立つ

修一

雪晴れや小さきクツの飛び跳ねて

都

大雪や漕ぎ出でて計る雪の丈

大雪や漕ぎ出でて計る雪の丈

立春や女性も含む鑑評会
風花や登校郡の急ぎ足

一穂

ときめきを赤々と焚きシクラメン

洋子

石仏の微笑たたう深き雪

石仏の微笑たたう深き雪

雪下し総出の留守に鳴る電話
登る屋根懐中湯婆胃に当てて

吉児

雪壁のつなぐ七戸や村の布令

恒夫

久闊の顔をぶらさげ桜餅

恒夫

雛段の三人官女微笑みて
待ちに待つ退去の日取り柳萌ゆ

邦男

天井に水影ゆらぐ春日和

礼

佳き日かなねんごろにして内裏様